

| | |
|------------------|---|
| Title | アンカラ大学教授ヤブズ・エルジャン, オゼル・エルゲンチ両氏訪問教授として滞在 |
| Sub Title | |
| Author | 坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1990 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.59, No.2/3 (1990. 7) ,p.168(338)- 181(351) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 彙報 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19900700-0168 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成二年三月六日

主査 慶應義塾大学文学部教授

同大学院委員

高橋 正彦

副査 慶應義塾大学文学部教授

同大学院委員 文学博士

高瀬弘一郎

副査 立正大学文学部教授

同大学院委員

百瀬今朝雄

学力確認担当者 慶應義塾大学文学部教授

同大学院委員 文学博士

高瀬弘一郎

アンカラ大学教授ヤブズ・エルジャン、オゼル・エルゲン
チ両氏訪問教授として滞在

平成元年一〇月五日より一一月五日までトルコ共和国のアンカラ大学言語・歴史・地理学部のヤブズ・エルジャン教授、オゼル・エルゲン教授が本塾に訪問教授として滞在された。両氏のそもそもの滞在目的は文部省の海外学術共同研究「中東とソ連の都市問題とエスニシティーの比較研究」のプロジェクトを日本側の分担者である坂本 勉（本塾文学部助教授）、山内昌之（東京大学教養学部助教授）、栗生沢猛夫（北海道大学文学部助教授）、内藤正典（一橋大学社会学部専任講師）と共同で行なうことにあつたが、たまたま坂本勉がアンカラ滞在中に両氏の知遇を得、いろいろお世話いただいたことが機縁となつて本塾に訪問教授として滞在されることになった。

両氏のプロフィールを簡単に記すと次の通りである。ヤブズ

・エルジャン教授は一九四〇年、トルコ東南部の都市マラトヤに生まれた。アンカラ大学言語・歴史・地理学部、同修士、博士課程を卒えたあと今に至るまで一貫してオスマン朝における非ムスリムの問題を追求してきた研究者である。トルコ語史料にもとづきながら非ムスリコの民族、宗派問題に迫ろうとするユニークな歴史家の一人で、その業績はトルコ国内ばかりでなく国外でも高い評価を受けている。一九七六年から約一年間、ケンブリッジ大学東洋学部に留学したこともあって、見事な英語を駆使される。代表的なお仕事に『オスマン朝におけるブルガリア人とヴォイヌク制』（アンカラ、一九八六）、『一九世紀のバルカンの教会（アンカラ、一九八七）、『パレスティナにおけるアルメニア教会』（アンカラ、一九八八）等がある。

オゼル・エルゲン教授は一九四五年、アナトリア西部、エーゲ海に沿うバルガマの町に生まれた。ヤブズ教授よりも五歳年下であるが、大学、大学院ではヤブズ教授と机を並べた同窓で、研究生生活でも終始、同じアンカラ大学で過ごしてきた。氏の専門は一六一―一八世紀におけるオスマン朝下のアナトリアの都市史である。アンカラ大学の教授を長く勤め、招かれてシカゴ大学の教授に移ったハリル・イナルジュク氏の社会経済史研究の学統をもっともよく継承する研究者の一人で、地道ながら重厚な学風をもって知られる。主要論文に「一六〇〇―一六一五におけるアンカラ経済史研究」（『トルコ経済史セミナー』八一―一〇）、「一七世紀初頭におけるアンカラの居住状況に関する若干の資料」（『オスマン朝史紀要』第一号）、「オスマン朝古典

期における名士、有力者層に関する若干の史料」(『オスマン朝史研究』第三号)等がある。

両氏は坂本勉が担当する大学院の「東洋史特殊講義」で学生を指導され、さらに一〇月一八日、午後五時より小泉基金の援助により大学院校舎三一三番教室において次の演題で講演をされた。

ヤブズ・エルジャン「オスマン支配と非ムスリコ、非トルコ人社会」

オゼル・エルゲンチ「オスマン朝の社会層位」

講演はヤブズ教授は英語、オゼル教授はトルコ語で行ない、トルコ語の通訳は鈴木 董氏(東京大学東洋文化研究所助教授)をお願いした。参加者は約三〇名、皆熱心に聞き入り、講演終了後の懇親会でも両氏を囲んで話がはずんだ。(坂本勉記)

モーシエ・コハヴィ教授講演会

テル・アヴィヴ大学考古学研究所長モーシエ・コハヴィ博士は一九六四年以来、日本人によるイスラエル遺跡発掘に関するイスラエル側代表として、わが国聖書考古学界、古代オリエント史学界に大きな貢献をされてきた。一九八九年秋、同博士夫妻の二度目の来日の機会を利用して、小泉基金による講演会を開催した。日時は一〇月七日(土)午後二時より、場所は三田キャンパス大学院校舎二階三二五B教室、演題は「ガリラヤ湖東岸における最近の発掘」であった。

この講演の中で博士は、自らの立案になる「ゲシュール計画」

(Land of Geshur Project)という発掘調査の中間報告を行った(スライド映写付き)。このプロジェクトは、これまで聖書考古学的に未開拓であったガリラヤ湖東岸(ゴラン高原南辺)の青銅器時代・鉄器時代諸遺跡を解明しようとするもので、まずテル・アフィック、テル・ハダル、ラヴィアの三遺跡が対象として選ばれた。又、後には金石併用期の円形祭祀遺跡ロゲム・ヒリの調査もつけ加えられた。調査は一九八六年から一九八九年までの四シーズンにわたり、一九九〇年は休止、一九九一年から再開される予定である。

コハヴィ博士の今回の講演は主としてテル・ハダルの鉄器時代層を扱い、その聖書的背景にいたるまで論じられた。テル・ハダルの鉄器時代二層の発掘によって、古代イスラエルとダマスカスのアラム人とのゲシュールの地をめぐる対立抗争の実態が明らかになりつつある他、鉄器時代初期のゲシュール王国についても新事実が判明しつつある。又、テル・ハダルやテル・アフィックに近い同時代遺跡エン・ゲヴは一九九〇年より日本隊によって発掘されるが、それによってこれ等三遺跡の相互関係が解明されてゆくものと期待される。

講演会には日本オリエント学会名誉会長三笠宮殿下をはじめ本学の学生、他校の専門家など多数が出席し、盛会であった。終了後、殿下及び数名のグループが参加し、東門下中国飯店においてコハヴィ夫妻を囲む夕食会を開催した。

コハヴィ博士の「ゲシュール計画」については、本学民族学考古学研究室編「考古学の世界」(新人物往来社、一九八九)